

THE Gaskell Society of Japan

Newsletter

No. 18 (April 2006)

日本ギaskell協会 ニューズレター

会長就任挨拶

鈴江 璋子 (創価大学大学院客員教授)

このたび山脇百合子初代会長から日本ギaskell協会会長を引き継ぐ事になりました。協会にとって初めての会長交代であり、責任の重大さと自分自身の至らなさを痛感いたしております。

日本ギaskell協会は 1988 年の創立以来、エリザベス・ギaskellの文学研究に取り組み、読者を増やし、研究者を育てる事に専念して参りました。全 7 巻にわたる『ギaskell全集』の刊行、研究書の上梓は、この努力の現れであります。フェミニズムによる女性文学読み直しの機運と、ヴィクトリア朝再評価の波にも乗って、着実に成果を上げて今日に至りました。女性としての人生哲学、歴史小説としての社会批判、あるいは社会小説として恵まれない層への目配りを読むなど、ギaskell文学の理解に関しても、斬新な試みがなされてきました。

山脇前会長によって敷かれたこの路線を継承して、私たちは新しい批評理論を反映し、さらに深くギaskellの文学を読み込むとともに、その成果を広く世に問うという積極性を育てていきたいと思ひます。英国ギaskell協会とも一層親密な関係を保ち、私たちの研究成果が世界の研究者に評価されるように、と念願します。現在、文学は冬の時代で大学の英文学科が改組されたり、一見役に立ちそうに見える「実務英語」が重視されたり、大学の英語教育が下請けに出されて、若い研究者に適当な職が見つからないなど、文学研究者が育ちにくい状況ではありますが、他方、各種文学賞が若い女性に与えられる、大学のうちそとに文学という営為に熱い心を燃やす若い人たちが存在するなど、期待できる材料もあるのです。音楽家が音を材料に、建築家が石や鉄を使って、独自の、しかも多くの人がその内部に入り込める世界を構築するように、作家も、鍛え上げ、選びぬいた言葉を用いて、独自の、しかも多くの人がそこに没入できる世界を作っているのだということを、むしろ今、はっきりさせるべきではないでしょうか。創作における集中——テーマの絞り込みは他の雑多な書き物にはないものです。

このような次第で、ギaskell研究は少し文学への傾斜を深めることになるでしょうか。今年の大会シンポジウムに、ベリンガムを「男性が女性に癒される伝統」の中に置いて見ようという意気込みが聞かれるのですが、ギaskellだけ、あるいはヴィクトリア朝だけという孤塔を離れて、広く文学の伝統の中にギaskellを置いて考えるのは非常に重要な試みだと思います。意外な発見があり、ギaskellの価値が新しく見いだされるのではないのでしょうか。

ギaskell協会はこれまで女性が主体となって運営されてきました。山脇前会長によって培われた良き伝統を受け継ぎつつ、会員一人一人がこれは自分の会だ、と思って愛し、例会や大会に出席し、自由に意見を語る組織にしたいと私は念願しています。会員のみなさんのギaskellに寄せる思いが、これからの会をリードしていくのだ、と私は信じます。

長期間力強い副会長であられた小池滋氏、事務局長として活躍された多比羅眞理子氏にはここで改めて敬意と感謝を捧げるとともに変わらぬご指導をお願い申し上げます。これからは東郷秀光副会長・長瀬久子事務局長と力をあわせ、努力して参りたいと存じますので、会員のみなさん、よろしくご支援、ご協力下さるよう、お願い申し上げます。

目次

会長就任挨拶	鈴江璋子	1
ニューズレターの限りない発展を!	山脇百合子	2
大会レポート	宮丸裕二	2-3
事務局報告(会計報告)	多比羅眞理子	4-5
新事務局長就任挨拶・お知らせ	長瀬久子	5
「試される読者」	山脇百合子	6
国際会議レポート		
--Elizabeth Gaskell and Manchester	閑田朋子	6
追悼		
--林芳子先生を偲ぶ	直野裕子	6-7
--シャープス先生、さようなら	大野龍浩	7
例会・大会予告		8

第 17 回大会レポート

宮丸 裕二

日本ギaskell協会第 17 回大会は、2005 年 10 月 2 日（日）に、東京都新宿区の早稲田大学西早稲田キャンパス国際会議場（第二会議室）において開催された。大会プログラムは下記の通りである。

大会は、山脇百合子会長によるご挨拶をもって、開会となった。

続いて、金丸千雪氏による司会で、木村正子氏と長瀬久子氏による研究発表が行われた。木村氏による発表「“The Grey Woman” における母と娘の物語」は、本短編に加えられてきたこれまでの批評の再考を問う意味で画期的な発表であった。社会のしくみの犠牲者としての女性を強調するのがこれまでのフェミニスト批評に一般的であったのに対し、本作品に描かれる偽装婚、異性装と重婚といった点に注目することで、本短編がジャンルの典型例にあてはまらないことを浮かび上がらせる。また、母から娘へと継承される経験という観点から検証を加えることで、社会の犠牲者たる女性の中にもある権力体系の転変が描き込まれていることを明らかにした。

一方、長瀬氏の「シャーロット・ブロンテを書くギaskell」では、二人の女性作家の友情を巡る伝説を客体化して、その再検証を行うものである。長瀬氏は、二人の交友関係は、『シャーロット・ブロンテの生涯』によって作り出され、今なお有効な「伝説」であると位置づけた上で、本作品を再読することで、また外部資料を用いて再検証することで、その伝説の生成過程を再度浮かび上がらせることを試みた。結果、両者の互いに対する興味に温度差があり、ギaskellが求めたほどにブロンテはギaskellに対して深い関心を抱いていなかったことから、二人の交友についての新たな関係性を提示した。

二つの研究発表をもとに、限られた時間の中ではあるが、活発な質疑や議論が行われ、また、次々に繰り出さ

ニューズレターの限りない発展を！

山脇 百合子 前会長
（実践女子大学名誉教授）

ニューズレターの巻頭に長いこと所感を載せて頂き、本当に有難うございました。1988 年日本ギaskell協会設立と同時に誕生した私たちのニューズレター。以後、今日までまるでギaskell協会の心臓のように健全な鼓動をうちつづけてきました。

会のみなさまとの心のつながりをニューズレターを通して感じられることは何にもまさるよろこびでした。

初期の編集長、久永東輝夫先生、つづいて名編集長として腕をふるって下さった足立万寿子先生他編集にたずさわって下さった方々に深い感謝の気持ちを捧げたいと思います。ニューズレターを通して日々ギaskell協会のメンバーたちの絆はますます強くなっていきますように！

第 17 回大会プログラム

		総司会	中央大学専任講師	宮丸 裕二
開会の辞	10:30		日本ギaskell協会会長	山脇 百合子
研究発表	10:40-11:40	司会	九州女子短期大学教授	金丸 千雪
			京都女子大学非常勤講師	木村 正子
			静岡県立大学助教授	長瀬 久子
総会	11:45-12:15	報告・審議	日本ギaskell協会事務局長	多比羅 真理子
シンポジウム	13:20-15:20			
			「ギaskell文学から学ぶもの」	
		司会・講師	慶應義塾大学名誉教授	東郷 秀光
		講師	実践女子大学非常勤講師	多比羅 真理子
		講師	実践女子大学名誉教授	山脇 百合子
講演	15:30-17:00	司会	早稲田大学教授	木村 晶子
			“Other Tales: On the Shorter Fiction of Gaskell and Collins”	
			早稲田大学教授	Graham Law

れる問いは発表者の今後の研究の続きが待ち遠しくなる、実に建設的な内容のものとなった。

昼食を前に、総会が行われたが、協会にとって一つの大きな節目となる決議や報告を含んでいたのも、重要な点を付記するが、詳しくは事務局連絡欄をご参照頂きたい。昨年の「日本ギaskell協会規約」の改訂によって定められた、各役員の任期が二期四年を限度とする規定を受けて、時期(2006年4月以降)の役員の改選が提議された。人事案として、新会長に鈴江璋子氏、新副会長に東郷秀光氏、新事務局長に長瀬久子氏、以下、継続留任を含め新幹事として12名の会員が、既存幹事会より推薦され、総会にて議決され、認められた。加えて、「日本ギaskell協会規約」の名称を「日本ギaskell協会会則」に変更、「幹事会」を「役員会」に変更(会長、副会長、事務局長も加わっている実態に合わせたもの)するなど、諸提案が議決により、決定された。続いて、諸報告と並んで、昨年度の会計報告、会計監査報告があり、承認された。

午後になり、シンポジウムが行われた。「ギaskell文学から学ぶもの」という今回のテーマを企画した東郷秀光が自ら司会を務めた。東郷氏、多比羅眞理子氏、山脇百合子氏といった、ギaskell文学を長年見つめ続けてきたベテラン三者を講師に迎え、批評というかたちをとりながら、同時に、積年に渡る読解経験から得たものが参加者に対して惜しみなく披露された。

東郷氏は、『妻たちと娘たち』—日常生活が人生のすべて—と題して、女性が社会的におかれた状況というもの余さず拾い尽くして描いたギaskellの特性に触れ、しかし、これが例外的に『妻たちと娘たち』では中心的な関心として前面に出ていないという点から説き起こした。あらゆる執筆分野におけるギaskellの関心を追いつつ、ギaskellの関心は生涯不変であり、むしろそれを含めた日常全体を描き出すという手法を体得した結果であったことを詳らかにした。

多比羅氏は、「「リジー・リー」—一代弁者から共感者へ—」と題して講じた。労働者の苦難を作品で扱ったことで知られるギaskellであるが、自らの身の置き所について見て行くと、災厄を被っている者の意見を代弁する立場から、共感する者としての立場へと変化を見せて行く。その変化を最も色濃く示す本短篇に注目することで、また書簡や同時代の図像的な資料に見られる社会状況の反映を確認しつつ論じた。受難者に肩代わりして主張を社会に知らしめる役割から、それ以前に理解者であろうとする役割へと、ギaskellがその作家としてのスタンスと領分を変えた、その変遷を見て取ることができた。

そうした語り手としてのギaskellは自らをどう語るかという問題を、続く山脇氏による『シャーロット・ブロンテの生涯』—ギaskellの共感と観察—が問題にした。伝記という最も客観性が求められるジャンル故に自己滅却の中で語られるはずの本作品でありながら、結果的には著者であるギaskell自身が主人公以上に読者の印象に残るという逆説を問題提起とする。その理由は、本作品が著者の人間観を反映し、著者の見る人生の真実を体現するものであることに求められることを、最終的に明らかにした。

Graham Law氏による“Other Tales: On the Shorter Fiction of Gaskell and Collins”と題する講演が行われた。司会には木村晶子氏が担当した。一作の無署名の短篇がギaskellの執筆にもウィルキー・コリンズの執筆にも帰せられ得たという事実に着想し、一見対極に位置する二人の作家が全面的に正反対の存在なのではなく、多くの特質を共有する同士であったことを問題にした。最終的には、二人の共通点と相違点とが整理したかたちで示された。パワーポイントを駆使した発表方法もさながら、数々の面白い逸話の紹介と並んで、時に統計的な資料を積み重ねて行く研究手法は、強い説得性で圧倒するのみならず、ミステリー小説顔負けの面白さで聴衆を引きつけた。その結果として、続く質疑の多くが賛辞に終始したことが印象深い講演であった。

大会のプログラム内容が全て終了した後の会場で、次期の役員の交代を受けて退かれることとなる方々の内、日本ギaskell協会設立以来今日に至るまで、重責を果たして支えて下さった山脇百合子会長と、小池滋副会長と、多比羅眞理子事務局長に感謝を表明する場がもうけられた。松岡光治氏の合図で花束が贈呈され、大野龍浩氏が会員を代表して長年にわたる尽力に対する感謝の意を述べた。

懇親会が当日5時30分よりイタリアンレストラン「アットン」(国際会議場裏)にて開催され、会員同士のさらなる知的交流を深める場が提供された。

なお、大会および懇親会の会場は、ともに、協会幹事にして早稲田大学教育学部教授の木村晶子先生にお世話いただき、大変快適な場所を得ることができたことをここに記して謝辞に代えさせて頂きたい。



事務局報告 (2005 年度 (平成 17 年度))

多比羅 真理子 前事務局長

1. 幹事会報告

第一回幹事会 (2005 年 6 月 25 日、会場: 日本大学文理学部、午前 11 時より) は例会に先立って開催。議題、審議内容は、1) 『ギヤスケル全集』の翻訳経過報告、2) 平成 16 年ギヤスケル協会総会で承認された規約の一部改正について、3) 第 17 回大会詳細事項、会場、講演者・懇親会の確認、4) 英国協会事務局長 Mrs Joan Leach の日本招聘の可能性について、5) 会長、副会長、他役員改選 (別項に記載) であった。

第二回幹事会 (2005 年 10 月 1 日、会場: 早稲田大学、午後 4 時 30 分より) は、従来の 12 月から、大会前日に変更して開催。議題、審議内容は、1) 例会の反省ワークショップ形式は新鮮で良かったので、若手研究家の育成の場として継続するとよいという意見があがる、2) 大会の役割分担決定、3) 翌日の大会総会へ提出する規約変更事項の確認 (新規約は日本ギヤスケル協会ホームページ、および『ギヤスケル論集』に掲載)、4) Mrs Joan Leach を 2006 年 6 月招聘し、例会でギヤスケルとナッツフォードについてのお話しをしていただく。当日は、小池滋氏にもご講演いただく。Leach さんは 5 月 31 日に来日、東京、名古屋、京都、熊本を観光し、6 月 8 日帰国予定。日本滞在費は日本側の負担、往復飛行機代は英国協会の負担とする。5) 第 18 回大会の会場 (静岡県立大学)、講演者に岡照雄氏 (京都大学) を候補とし、プログラムは従来通り、研究発表、シンポジウム、講演とする。6) 『ギヤスケル全集』最終巻『妻たちと娘たち』の経過報告。

2. 新役員

平成 17 年度第一回幹事会において、新役員を以下の通りに選出し、10 月 2 日の大会総会において承認された。その任期は 2006 年 4 月からとする。

会長	鈴江璋子氏 (実践女子大学名誉教授・創価大学大学院客員教授)	
副会長	東郷秀光氏 (慶應義塾大学名誉教授)	
事務局長	長瀬久子氏 (静岡県立大学助教授)	
役員	市川千恵子氏 (釧路公立大学助教授)	井出弘之氏 (東京都立大学名誉教授)
	木村正子氏 (京都女子大学非常勤講師)	関口章子氏 (北里大学非常勤講師)
	多比羅真理子 (実践女子大学非常勤講師)	波多野葉子氏 (筑波学院大学助教授)
	松岡光治氏 (名古屋大学教授)	宮丸裕二氏 (中央大学専任講師)

以上の各氏を第 10 期新任役員とし、任期は 2006 年 4 月から最大 2 期 4 年間。

大野龍浩氏 (熊本大学教授)	関田朋子氏 (日本大学講師)
直野裕子氏 (甲南女子大学教授)	諸坂成利氏 (日本大学教授)

以上の各氏は第 9 期役員として再任され、その任期は 2008 年までの 1 期とする。

会計監査 大石健太郎氏 (早稲田大学教授)	大島一彦氏 (早稲田大学教授)
-----------------------	-----------------

以上の各氏は留任。(五十音順)

日本ギヤスケル協会設立以来会長を務められた山脇百合子氏は、名誉会長となられる。名誉会員には従来の近藤いね子氏、松村昌家氏に加えて、新たに小池滋氏、巽豊彦氏が推薦される。

3. 会計報告

第 17 回大会総会において平成 16 年度会計報告が承認された。(右頁に記載)

4. 事務局移転のお知らせ

事務局長の勤務校が事務局の所在となるという規約の変更に伴い、長らく実践女子大学英文学科研究室にあった事務局が、新事務局長長瀬久子氏の勤務校、静岡県立大学に 2006 年 4 月より移転する。(移転先は本ニューズレター末尾に記載)

日本ギヤスケル協会設立以来、17 年間もの長い間事務局を置いて頂いた実践女子大学、並びに同大学英文学科の諸先生方、研究室の皆様には様々な形でご支援、ご尽力を賜りましたことを感謝申し上げます。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2004 年度（平成 16 年度）会計報告

PDF 版につき省略致します

新事務局長就任挨拶

長瀬 久子 新事務局長

ギヤスケル協会設立以来初めて事務局が日野の地を離れ、富士を間近に望む静岡郊外谷田の丘に移りました。私自身は入会後まだ 8 年の新米役員の上、事務に堪能でもありませんが、新事務局には広報・情報担当の宮丸裕二、経理担当の関口章子という強力な役員が揃っています。3 人で協力して、旧事務局の良いものを受け継ぎつつも、新時代に対応すべく事務の改革に取り組んでまいります。そのひとつが昨年 11 月に書面でご案内した会員用メーリングリストの設置です。リストの利用法は種々ありますが、例会大会の出欠席の返事等もリストでできるようにしたいと考えております。もちろん今まで通り葉書によるご連絡も可能です。また、改革は常に経費の節減をも意味するようですが、協会の経費も可能な限り節約して、皆様からお預かりした会費を最も有効な形で使えるよう蓄えておきたいと思います。さしあたり皆様の目に見える形としては、秋の大会ポスターが半分の大きさになる予定です。これは新会長のご発案で、些細なことのようにですがポスター印刷代、それを入れる大きな封筒代、送料等々と、塵も積もれば馬鹿になりませんし、ポスターの効果は変わりません。ご挨拶の締めくくりが文学とは程遠いみみっちい話に落ちたようですが、さにあらず、このような小さな節約こそ、‘economy was always elegant’であった Cranford の世界への最短距離——ギヤスケル協会に最もふさわしいあり方なのです。

事務局よりお知らせ

- 4 月 1 日より事務局の連絡先が下記のように変更されました。
住所：〒 422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1 静岡県立大学 国際関係学部 長瀬研究室内「日本ギヤスケル協会」
電話：054-264-5357
e-mail: <nagase@u-shizuoka-ken.ac.jp>
- 同封の振込用紙で本年度の会費納入をお願いします。年会費 一般 ¥5,000、学生 ¥3,000、英国協会入会、継続希望の方はプラス ¥3,500 (年会費 16 ポンド、一括送金手数料、通信費) です。英国協会への送金希望の方は 8 月 10 日までにお振込みください。振り込み手数料の関係上、期限を過ぎてお振込み頂いても送金できません。同封の「会費の振込みについてお願い」でご説明しましたが、今年度の会費は「日本ギヤスケル協会」でなく、事務局長個人名の郵便振替口座にお振込みください。
- 大会を欠席する会員は委任状をご提出ください。平成 16 年の規約改正により、総会成立には過半数の会員の出席または委任状が必要になりました。大会案内に同封される出欠席確認用葉書が委任状を兼ねています。必要事項を書き込んでご投函ください。

試される読者

—『シャーロット・ブロンテの生涯』を 訳し終わって—

山脇 百合子
(実践女子大学名誉教授)

『シャーロット・ブロンテの生涯』は、読者に深い理解力を強要する。ギaskellは、シャーロットの生涯を語りながら、自らの主観的な解釈はいっさいしていない。

作者ギaskellは読者の前にシャーロットの生涯にかかわる多くの真実を写し出して見せながら、自分の意見は胸のおくにしまわれて、決して読者に見せようとしな。すべて読者の判断にまかせるというギaskellの主張は全ページにみなぎっている。理解力を要求される読者は、果たして読者としての資格を持つものかどうか、作者ギaskellに試されていることを感じる。

読者は、作者ギaskellに呼びかけられて、必死にその声に応えるようにしているうちに、ギaskellの魔力のような力にとりこになって行くのである。

Art Treasure Exhibition”、大野龍浩先生の“Are Mary Barton and North and South Industrial Fiction?”そして私の“Labour Disputes and the City”でした。国際会議は始終、盛況で、Linda Hughes 先生・Martin Hewitt 先生のご講演、Pickering & Chatto 社からの Gaskell 全集 (*The Works of Elizabeth Gaskell*) 出版を記念したパネルなど、何れも印象深く大変に勉強になりました。

このような貴重な経験ができましたのも、英国の協会との間に確かな信頼関係を築かれました日本ギaskell協会の先生方のおかげです。この場をお借りして、山脇百合子先生をはじめとする先生方に、厚く御礼申し上げます。

国際会議レポート

Elizabeth Gaskell and Manchester: Identity, Culture and the Modern City

関田 朋子
(日本大学講師)

昨年 (2005 年) 7 月 19~21 日に、Manchester Metropolitan University において国際会議 Elizabeth Gaskell and Manchester: Identity, Culture and Modern City が開かれました。英国の Gaskell Society の 20 周年を記念する本会議は、English Heritage のサポートを得て Gaskell Society と会場校の Manchester Center for Regional History によって開催され、当時の Manchester を中心とした地域社会のアイデンティティ形成の鍵となり、かつギaskellの作品形成においても重要な意味を持つ社会的・文化的コンテクストを探究することを目的としました。

約 40 件ほどの発表は、“Performing Art”、“Re-imagining Regional Topographies”などテーマ別タイトルをもつ 14 グループに分けられました。日本ギaskell協会の会員による発表は、松村昌家先生の“The Hertford Gallery in Manchester

追悼

林芳子先生を偲ぶ

直野 裕子 (甲南女子大学教授)

林先生が心不全で 9 月 3 日に亡くなられたのを知ったのは、ギaskell大会でのこと。昨今の大学の厳しい状況のなか、お互い近くに住んでいながらゆっくり話もできないほど忙殺され、大会でお会いできるのを楽しみにしていた。

先生は G. エリオット研究を出発点とされているが、ここ 20 年近くはギaskell研究に精力的に取り組んでこられた。なかでも 1998 年ご出版の松原恭子先生との共訳『メアリ・バートン』は大きな成果のひとつである。同年、大会では「劇化された『メアリ・バートン』」と題して、劇作家兼俳優ブーシコーによって 1866 年初演された『ロング・

ストライキ』について発表された。注目に値する興味深いものだった。その前年 6 月の例会では「魔女ロイス」について講演され、私が司会を務めた。多くの文献に当たられただけでなく、セーレムの現地調査も交えた詳細多岐にわたるお話で、ぜひ出版をと勧めたのを覚えている。勤務校神戸女子大の紀要や英文学会誌に発表された中・短編を中心とした論文も多く、それが松岡光治先生編『ギaskellの文学』での A・イーソンの「短編小説」の翻訳にもつながっている。今後の活躍がますます期待されていたのに、還暦を目前にして逝かれた。

大学では学科主任の 2 年目で、夜遅くまでの会議が続くなか、体調のことなど口にもされることもなく 7 月下旬まで授業をされての 9 月の訃報に、どなたもずいぶん驚かれたと聞く。

遅ればせながら仏前にお参りさせていただき、あのいつもの笑顔の写真を拝見し、改めて林先生の大きな優しいお人柄を偲んだ。

シャープス先生、さようなら

大野 龍浩（熊本大学教授）

シャープス教授 (1936-2006) が、1 月 6 日スカーバラの病院で亡くなられた。ここに氏との思い出を記し、ささやかながら哀悼の意を表したい。

拙訳『シルヴィアの恋人たち』を献呈したところ、お返しに記念碑的労作 *Mrs Gaskell's Observations and Inventions* (1970) が送られてきた。献辞に “From John Geoffrey Sharps, Another Admirer of This Novel, 10 March 1998.” とあった。面識のない日本の一ギaskell愛好家に対するこのような厚意に、いたく感動した。

2003 年 9 月、ウィトヴィ・ツアーに参加したときに拝聴した講演の中で、氏は二つの研究成果を明らかにされた。“The Half-Brothers” の初掲載本を発見したことと、*The Life of Charlotte Brontë* 初版の発行日が 1857 年 3 月 25 日であることだ (27 日ではなく)。講演の詳細を活字にしてくださるよう頼んだら、氏はそのつもりである旨答えられた。期待して *Newsletter* や *Journal* を見ていたが、なかなか掲載されない。2005 年 7 月、マンチェスタで開かれた学会でお目にかかり、進捗状況を尋ねたところ、「まだ書いていない」と言われた。これが氏とお会いした最後となった。せっかくの発見が公になることはないのかと残念に思っていたら、一部が新ギaskell全集第 3 巻 429 頁に明らかにされていることが分かった。よかった。

2005 年 1 月のお手紙に、わたしの *Ruth* 論についてお褒めの言葉があった。自分の方法論に対して諸方面から寄せられる批判にやるせなさを感じていたときだったので、救われた。

同年 7 月、マンチェスタにおける学会で、わたしの発表会場で氏の姿があった。終了後、ひとこと “Well done.” と言われた。光栄だった。

1929 年に A. S. Whitfield によってはじめられたギaskell研究の伝統が日本でいまでも続いていることを、教授はことのほか喜ばれていた。この伝統が廃れないように微力を尽くしたい。それこそ氏がわたしたちに望まれていることだから。



2004 年 9 月、ナッツフォードの
ブルーク・ストリート教会にて。
手前は奥様。

2006 年度 日本ギaskell協会 例会・大会のお知らせ

2006 年度日本ギaskell協会例会

2006 年 6 月 3 日（土曜日） 午後 2 時より

於 実践女子学園 渋谷キャンパス内「桃夭館」

2 時～ 3 時 講演

小池滋（東京都立大学名誉教授）、『クランフォード』は落語的ソープオペラ

3 時～ 4 時半 講演

ジョウン・リーチ (Joan Leach) 、'Knutsford and Cheshire in Elizabeth Gaskell's life and works'

第 18 回 日本ギaskell協会大会

2006 年 10 月 1 日（日曜日）

於 静岡県立大学

会員の皆様には時間、プログラムなどの詳細を追ってお送りする予定です。ギaskell協会ホームページ (<http://www.soc.nii.ac.jp/gaskell/>) の方もご覧下さい。

会員以外の方もお誘い合わせの上、是非ご参加下さい。

メーリングリストへのお誘い

この度、日本ギaskell協会の公式のメーリングリストを設けることとなり、既に数十名の参加でスタートしております。

これによりギaskellやギaskellに関連するリアルタイムの情報をより早く、会員の皆様が共有することができます。また、大会発表などについての学術的な討議、ギaskellの新刊その他の紹介、ギaskellのテキスト解説やその背景に関する質問と回答、人事採用や執筆企画、講演会の募集や応募など、様々な話題で活発に利用されています。

未登録の方で、登録を希望される方は、登録したメールアドレスを記載の上、広報担当宮丸まで、ご一報下さい。また、メーリングリストに関する質問等も同様に受け付けております。

編集後記

- ・ 本年のニューズレターは役員改選により担当が宮丸裕二に変わり、広報担当、事務局の提案によりリニューアルしました。
- ・ 編集にあたりまして、新旧それぞれの会長、事務局長、および寄稿者の皆様にはお世話になりました。また、本号の印刷工程では静岡県立大学経営情報学部数学研究室の学生さんたちに、発送作業では国際関係学部長瀬研究室の学生さんたちの多大な協力を得ました。ここに記して謝辞に代えたいと思います。さらに、新年度から 2 種類のデザインの協会封筒を準備しましたが、その印刷にもやはり数学研究室の学生さんたちの協力を得ており、そのデザインも同研究室の浅見公一氏、酒井美那氏のお世話になりましたこともこの場をお借りして付記致します。
- ・ 誤記やその他訂正すべき点がありましたら、ご面倒ですがご連絡をいただけましたら幸いです。可能な限り今後に活かしてゆきたいと思います。
- ・ 次号以降の編集においても会員の皆様には多々お世話をおかけしますが、ご協力をお願い致します。

発行：日本ギaskell協会

〒 422-8526 静岡市駿河区谷田 52-1

静岡県立大学 国際関係学部 長瀬研究室内

054 (264) 5357

URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/gaskell/>

email: <nagase@u-shizuoka-ken.ac.jp>

発行日：2006 年 4 月 1 日